

2015年度

キャリアデザイン学部社会人入学試験

英語

問題は1題で、20行の英文を読み、和訳をする問題でした。

英文は著作権者の許諾を得ていないため掲載いたしません。問題の概要は以下の通りです。

言語の本質は、人間の活動である。言語の話し手と聞き手の関係は、言語について、そして文法について理解する時に、決して忘れてはならない事柄である。しかしながら、これまで、その事はしばしば看過され、言葉は事物のように扱われてきた。それは、書かれた言葉、印刷された言葉によって助長された考え方であるが、その考え方は、根本的に誤りである。

言語を産み出す人、受け取る人である二人の個人を、それぞれ話し手と聞き手と表して良ければ、話され、聞かれる言葉が、言語の主要なものであり、それは、書かれるもの、印刷されるもの、そして、読まれるものよりも、はるかに重要である。それは、文字のなかった時代においては、自明の事であるが、今日のような時代においても、私たちは、書くよりも圧倒的に話して生活しているのである。話す事、そして聞く事を考慮しないならば、そして書く事が話す事の代用である事を顧みないならば、言語が何であるか、どのように言語が発達してきたかを決して理解することはできないであろう。

(出典)

作品名： “Philosophy of Grammar”

著作者名： Otto Jespersen

問題の関連箇所： p.17

出版社名： George Allen & Unwin, London

出版年： 1924

ISBN : 0 04 400009 X

小論文 問題

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

《信頼社会》

「人間はみんな信用できない」と考えるのが低信頼者だとすれば、高信頼者は「人間はみんな信用できる」と考えるお気楽者に違いないと私たちは思うのですが、実はそうではなく、「人間にはいい人もあれば、悪い人もある」と考えるリアリストでもある。この事実は、私たちが高信頼者に対して抱いているイメージを根本から考え直す必要があることを示しています。なぜならば、高信頼者は他人との協力関係を築こうという気持ちは持ちつつも、その協力関係がかならず築けるとは楽観視していないということでもあるからです。「ひょっとして自分は裏切られるかもしれない」ということも知りつつ、それでもなお協力関係を結ぼうと考えているのが彼ら高信頼者であるわけです。

なぜ高信頼者は他者との協力関係を築こうとするのでしょうか。それは、他者と協力関係を築くことにはそのリスク以上の意義があることを知っているからでしょう。分かりやすく言うならば、他人と協力しあうことで得られる成果は、裏切られる悔しさよりもずっと大きいことを知っているということになるでしょう。また、それと同時に、人生とはギブ・アンド・テイクなのだから、まずは自分が「ギブ」、つまり協力的行動をしないかぎり、何も始まらないということを知っているのだと思われまふ。他人の行動をより正確に予測できるというのは、高信頼者の特性です。したがって、高信頼者たちは「人間関係は持ちつ持たれつ」、つまり他人に協力することが人生に不可欠であると思っているというわけです。

これに対して、低信頼者の場合は最初から他人との協力関係はありえないと思っているので、他人がどれだけ信用できるかどうかなど考えてもみようともしません。その結果、低信頼者の信頼性検知能力は磨かれることなく終わってしまいます。さらに、彼らには相手の信頼性を正確に予想する能力がないので、しばしば相手に裏切られたり騙されたりします。この結果、ますます低信頼者は相手を信用しなくなってしまうので、さらに他人の信頼性を検知する能力が育たないという結果になってしまいます。

《安心社会》

社会の仕組みそのものが「安心」を保証してくれる

安心社会の内部においては、そもそも相手が信頼できるのかできないのかといった「査定」そのものが必要ありません。社会自体が、その人が約束を守ることを保証しているわけですから、相手が「身内」であるかぎり、相手が裏切れることはまずありえないし、身内以外の「よそ者」とは手を組まなければいいだけのことです。

そのような社会において生き残るために最も重要なことは、「誰と付き合うことが最も安心をもたらしてくれるか」ということを見極めることではないかと思われまふ。つまり、自分の属している集団の内部で最も力を持っているボスが誰であるか、またそのボスと仲良くなるにはどの人を味方に付けておかねばいけないか、あるいは誰と必要以上に仲良くするのはよくないか—こういった集団内部の力関係、人間関係を正確に読み取っておくことが、その人が社会に適応していくために大事なテーマになってくるといふわけです。こうした人間関係を読み間違えて行動してしまうと、集団主義社会の中ではその後、大変生きづらくなってしまうまふ。

したがって集団主義社会に生きている人たちにとっては、信頼性検知能力よりも関係性検知能力が求められるであろうと容易に推測できるわけまふ。

(中略)

関係性検知能力を実際に調べてみると、彼らの能力は集団をまとめるためではなくて、自分が属している集団の内部でできるかぎり波風を起こさないようにすることに向けられていることが分かってきたのです。彼らの関係性検知能力が、いわば「後ろ向き」のものであることは、ある意味で当然のことと言えます。そもそも彼らが他人の関係性に気を遣うようになったのは、集団内部の秩序や安定性が揺らぐことで、自分に火の粉がかかってきては困るといふことが原点でした。つまり、なるべく自分の地位を維持したいという欲望が最初にあつて、それを守るために人の顔色をうかがう必要があつたわけまふのですから、関係性検知能力が現状維持のために用いられるのはむしろ当然すぎるほど当然の帰結だと言えます。

(山岸俊男『日本の「安心」はなぜ消えたのか』2008年より。ただし一部改変している。)

【問1】高信頼社会に適応して生きていくにはどのような努力が必要でしょうか。君の考えるところを50字以内(句読点を含む)で述べなさい。

【問2】著者はこのあと、現代の日本は「安心社会」から「信頼社会」への転換が迫られていると指摘しているが、なぜそのような転換が必要なのか、君の考えるところを400字以内(句読点を含む)で述べなさい。